様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 ２ 日現在

機関番号：３２８２１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１５８９２

研究課題名（和文）戦後我が国の看護の発展に寄与した人物の語りから形成する学問史の基礎的研究

研究課題名（英文）A Fundamental Study of Academic History Formed from the Narratives of Persons Who Contributed to the Development of Nursing in Post-War Japan

研究代表者
北島　泰子（Kitajima, Yasuko）

東京有明医療大学・看護学部・准教授

研究者番号：３０４３４４３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：日本の看護学の発展に寄与した先人達の直接語る言葉を収集し、看護の学問史形成を試みた。看護の大学教育の黎明期に看護教育に携わった、または教育を受けた人々32人にインタビューを行った。「看護は学問か」という問いに対して「看護は学問ではない」「学問としては発展途上だ」「看護が学問的根拠に立って実践されるべき性質の学問であるとしたら対象となる人間をどう支援するかの学問となる」などの言葉が聞かれた。看護理論については、日本の文化の中でどのように受け入れられるか、実際に適用できるかなどの検証が積極的になされてこなかったという語りがあった。看護学のための新しい情報が学問史形成の観点から収集できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
戦後75年を迎え、看護のいわゆる戦後第一世代の研究者達が亡くなっていくことが懸念される中、その人々の語る言葉を収集することは急務でありかつ重要である。看護におけるさまざまなイベントに対する考え方（思想や理論）およびそれらの歴史について整理することは、今後の看護学を発展させていくうえで必要である。このことによって、看護基礎教育における一般専門科目としての看護学史の確立、一般化に寄与し、それを修めた者が、将来看護の取りうるべき道を考える際の橋頭堡的な役割を果たすことが期待される。

研究成果の概要（英文）：An attempt was made to formulate an academic history of nursing by collecting the direct words of predecessors who contributed to the development of nursing science in Japan. Thirty-two people who were involved in or were educated in nursing education at the dawn of university education in nursing were interviewed. We have done the following. In response to the question, "Is nursing an academic discipline?", she said, "Nursing is not an academic discipline," " It is still developing as an academic discipline," "If nursing is a discipline-driven discipline, then it is the discipline of how to support its target persons." As for nursing theory, she said that there had been no active testing of how it would be accepted in Japanese culture or whether it could actually be applied to hospitals. New information for nursing science was collected in terms of academic history formation.

研究分野：経済学

キーワード：看護の学問史　看護教育の大学化　看護学史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

学問一般にとって、その学問の歴史を学ぶことは、学問体系の見取り図を描くという役割がある。看護学において看護学史がどのような位置付けにあるか改めてみてみると「看護史（看護歴史、看護学史、the history of nursing）は科学史の一分野をなし、実証的な研究の成果に基づく学問である」とされ、看護史と看護学史が同義語となっている。一方で申請者が学んできた学問である経済学では、経済史と経済学史では同じものをさすのではない。時間の流れのなかで経済に関連して起きたイベントそのものが経済史であり、それを見てきた人々が何を思い、考えたか、それを研究する学問が経済学史である。看護学でいえば、看護史は時間の流れのなかで看護に関連して起きたイベントであり、それを見てきた人々が何を思い、考えたのかを研究する学問が看護学史ということになる。我が国には看護史を扱った書物や研究、研究会等が存在し、その時々で思想は存在するが、看護学史としてそれらを体系的にまとめられた研究や文献が非常に乏しい。戦後我が国の大学看護学教育は、1952（昭和 27）年の看護系大学の開校から始まり、その数は次第に増え 2015（平成 27）年度では 248 校が開校するに至っている。看護が経済学同様、実学からひとつの学問形態を築いていった過程がそこにあるという証拠であろう。しかし、それらの記録の蓄積、系統的なまとめがなされていないことは誠に遺憾である。戦後、看護の大学教育が開始されるに至った時代に看護に携わった人々の思想は非常に貴重なものである。戦後 70 年を迎え、看護の戦後第一世代の研究者達が亡くなっていくことが懸念される中、その方々の語る言葉を収集することは急務である。我が国における看護の歴史の始祖および、その時代を看護とともに生きた人々の語る言葉が今や消え掛かっている。この霧散しそうな情報を保存することは看護学の今後の発展のためにも大変重要なことである。

２．研究の目的

本研究の最も大きな目的は、看護の学問史を作ることである。経済学や心理学など、およそ学問と呼ばれるものはそれぞれの学問史を持っているものだが、歴史の浅い看護学には学問史がない。戦後、我が国初の看護系大学開設から 60 年以上経過し、我が国における学問としての看護の発展に寄与してこられた戦後第一世代の研究者、教育者が現役を退かれたこの時期に、看護におけるさまざまなイベントに対する考え方（思想や理論）およびそれらの歴史について整理することは、今後の看護学を発展させていくうえで必要である。このことによって、看護基礎教育における一般専門科目としての看護学史の確立、一般化に寄与し、それを修めた者が、将来看護の取りうるべき道を考える際の橋頭堡的な役割を果たすことが期待される。

３．研究の方法

【2016 年度】

2016 年度は、看護の大学教育の黎明期に看護系大学を卒業し、その後実際に看護教育に携わった人物の特定を行った。

１） 看護学史に関連する重要人物の追跡のための資料収集

看護における大学教育の黎明期に看護教育を受け、日本の看護学の歴史の構成要素となるイベントを体験してきた先人の洗い出しを文献調査によって行った。文献は、論文に限定せず、日本看護歴史学会が収集したデータや日本看護協会や日本赤十字社の発行する歴史本などを広く収集した。わが国の看護系大学の嚆矢は、1952（昭和 27）年に開設された高知女子大学家政学部衛生看護学科であり、その後相次いで東京大学医学部衛生看護学科、聖路加看護大学が開設された。したがって、本研究の聞き取り調査の対象者は、これらの大学を早い段階で卒業した者となった。

２） インタビューガイドの作成

１）の作業と並行して、実際のインタビューで何を聞くことが本研究に必要であるか、その内容を検討しインタビューガイドを作成した。インタビューは半構造化インタビューとした。インタビューガイドを作成する際の視点は、①インタビュー対象者を特定した経緯を盛り込むこと、②現在表在化していない、人に付随する看護のイベントを引き出す契機となる言葉が盛り込まれていること、③そのイベントに対する思想を語ってもらうこと、④自分以外に戦後の看護を支えてきた人物、イベントに対する思想を持っていた人物を知っているか、に重点を置いた。しかし、実際のインタビューでは思いがけない会話から重要な情報が得られる可能性が考えられるため、インタビューガイドの内容にかかわらず、それ以外の話題に関しても柔軟に対応できるようにした。

【2017 年度】

2017 年度からは、2016 年度に洗い出した対象への聞き取り調査を行った。

１） インタビューの実施

2016 年度の準備をもとに実際にインタビューを行った。インタビューを実施する時は基本的に 2 人組で行動した。主たる研究者がインタビュー対象者から情報を得ることにできるだけ専念し、もう一人の研究者が会話のメモを取り、ボイスレコーダの動作を確認するなどに専念することとした。

インタビュー対象者は 2016 年度に特定した人物以外にも及ぶことが予測された。その理由は「自分以外に戦後の看護を支えてきた人物、イベントに対する思想を持っていた人物」をインタビューの中で紹介される機会が訪れる可能性があるからであった。実際に 2016 年度に特定した人物以外で生き証人から紹介される人物が複数人おり、看護の学問史を形成するうえで重要人物でもあり、優先的にインタビューを実施した。

２）学会発表による研究の方向性の確認

研究の途中で、その時点までに明らかになった結果を看護系学会等で発表し広く意見を収集した。当該意見をもとに研究の方向性を確認し、さらなる調査を継続した。

【2018 年度】

１）インタビューの実施

2017 年度に引き続いて看護の学問史形成に重要な人物へのインタビューを実施した。インタビュー方法は 2017 年度で実施した方法をそのまま踏襲した。

２）学会発表による研究の方向性の確認

研究の途中で、その時点までに明らかになった結果を看護系学会等で発表し広く意見を収集した。当該意見をもとに研究の方向性を確認し、さらなる調査を継続した。

【2019 年度】

１）インタビューの実施

2018 年度に引き続いて看護の学問史形成に重要な人物へのインタビューを実施した。インタビュー方法は 2017 年度で実施した方法をそのまま踏襲した。

２）まとめ

研究の成果をまとめ、広く世に公表する準備を継続している。

４．研究成果

おおよそ学問といわれているものは、それぞれの学問史を持っている。学問史を持たない看護は、学問として発展する一方で原拠となるものがないままである。看護学の学問性やその成熟度が曖昧にしか語られないのは他学問分野のような学問体系に欠けるところが散見されるためであり、その一つは学問史がないことに起因すると考え、看護の学問史をまとめるという着想に至った。我が国の看護は大学教育がなされているが系統的にまとめられた学問史を持たない。そこで本研究では、日本の看護学の歴史の構成要素となるイベントを体験してきた先人の直接語る言葉を収集し、看護の学問史をまとめることを目的とした。看護における大学教育の黎明期に看護教育に携わった、または教育を受けた人々32 人にインタビューを行った。インタビューでは当時の看護の大学教育そのものに言及したものや、大学を卒業してまで看護婦になることへの疑問についてなどが語られた。また看護の学問性とは何かや海外から入ってきた看護理論について語られたものなどさまざまであった。

インタビューでは異口同音に看護は戦後大学教育という形を作ったが中身はなかったと語られている。戦後早い時期に開設された当時の看護大学では、大学教育を受け看護の博士号を持った人々が教育者となっていたのではなく、医師が“ 看護婦ならこの程度 ”という観点で講義を行っていたことなどが理由として挙げられていた。また、看護の学問史をまとめるにあたり「看護は学問か」いう問いに対しては、「看護は学問ではない」、「学問ではあるが特殊な学問である」などの様々な意見があった。学問としては発展途上だとした人は、学士、修士、博士の各教育課程で、それぞれが何を教えるのかということが明確になっていないことをその理由としていた。また看護が学問的根拠に立って実践されるべき性質の学問であるとしたら、対象となる人間をどう支援するかということに関わる学問だといえるのではないか、とも語られている。

種々の看護理論については、海外から入ってきたものが日本語に翻訳された時点で完結とみなす気風があり、日本の文化の中でそれらがどのように受け入れられるか、実際の看護の現場に適用できるかなどの議論や検証が積極的になされてこなかったという語りがあった。看護理論には諸理論に対する対立理論やそれらにかかわる学派の形成などがみられないが、それはなぜかという問いには、看護は純粋理論ではなく、生きるという現象の中で関

わっている学問とすれば、対立理論という形にはならないのではないかという語りもあった。

加えてインタビューからは予期せぬ情報を得ることもあった。その中で戦後の沖縄の看護を語った言葉には、米国統治下の沖縄には既に米国式の看護教育が浸透していたこと、米国式の看護教育であったことによって准看護師制度は存在しなかったこと、マラリアや梅毒などの感染症が優れた看護婦の保健衛生活動によって激減したことなどがあった。

戦後 75 年を迎え、看護のいわゆる戦後第一世代の研究者達が亡くなっていくことが懸念される中、その人々の語る言葉を収集することは急務でありかつ重要である。看護学のための新しい情報が学問史形成の観点から集められることは、日本の看護系大学が将来歩むべき道の一指標になる可能性があり、看護学の今後の発展に貢献するであろう。

【2016 年度】この年度は看護における大学教育の黎明期に看護教育を受け、日本の看護学史の構成要素となるイベントを体験してきた先人の洗い出しを文献調査によって行った。わが国の看護系大学の嚆矢は、1952（昭和 27）年に開設された高知女子大学家政学部衛生看護学科であり、その後相次いで東京大学医学部衛生看護学科、聖路加看護大学が開設された。従ってインタビューの対象者は、これらの大学を早い段階で卒業した者、またこれらの大学の当時の教員とした。

【2017 年度】前年度選出した調査対象者にインタビューの協力が得られるか否かを確認する手紙の送付やインタビューの日時や場所の調整を行い、準備が整い次第インタビューを実施した。しかしながら、戦後我が国の看護の発展に寄与した人物としてインタビューを希望したもののそれが叶わない人や、やっとその人に関係する人にたどり着いたものの、既にお亡くなりになっているという知らせを受けるなどの事情からインタビューができないことも多々あった。インタビュー実施後は、インタビューデータから逐語録を作成し、音声とともにオーラルヒストリーとして貯蔵した。

【2018 年度】2017 年度から引き続き、調査対象者とのインタビュー日時の調整およびインタビューの実施を全国規模で実施した。同時にインタビュー結果をまとめ、学会等において結果の中間公表を行なった。

【2019 年度】当初の予定であった 3 年間の研究期間を 1 年延長し、前年度から引き続きインタビューを実施した。またインタビュー結果をまとめ学会等において結果の公表を行なった。研究期間中に 32 人へのインタビューを実施した（表 1）。

表 1　戦後我が国の看護の発展に寄与した人物インタビュー対象者

インタビューイーとして選出した理由	人数
東京大学医学部衛生看護学科創設当時同大学の医学部生	1
東京大学医学部衛生看護学科の学生	7
東京大学医学部衛生看護学科の教員（看護師）	2
東京大学医学部衛生看護学科の教員（看護師ではない）	1
東京大学医学部附属看護専門学校の学生	1
高知女子大学家政学部看護学科の学生	2
東京看護師範学院の学生	3
聖路加短期大学の学生	2
千葉大学看護学部創設初期の教員	2
琉球大学保健学部の学生	2
琉球大学保健学部創設初期の教員	1
その他の看護識者	8

【本研究に関わる研究業績】

・第 38 回日本看護科学学会学術集会「我が国の看護学の成立過程の探求―経済学史をてがかりとして―」2018 年 12 月 16 日発表

・日本看護研究学会第 45 回学術集会「戦後我が国の看護の発展に寄与した人々の語りに対する文献調査―戦後の沖縄の看護に焦点をあてて―」2019 年 8 月 21 日発表

・第 23 回日本看護管理学会学術集会「本土復帰前の沖縄における看護の質に関する一仮説（第一報）」2019 年 8 月 23 日発表

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 北島泰子
２．発表標題 我が国の看護学の成立過程の探求―経済学史を手がかりとしてー
３．学会等名 第38回　日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 北島泰子
２．発表標題 戦後我が国の看護の発展に寄与した人々の語りに対する文献調査―戦後の沖縄の看護に焦点をあててー
３．学会等名 日本看護研究学会第45回学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 北島泰子
２．発表標題 本土復帰前の沖縄における看護の質に関する一仮説（第一報）
３．学会等名 第23回日本看護管理学会学術集会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	前田　樹海 (Maeda Jukai) (80291574)	東京有明医療大学・看護学部・教授 (32821)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	山下　雅子 (Yamashita Masako) (20563513)	東京有明医療大学・看護学部・准教授 (32821)	2019年4月に本人死亡のため研究分担者から削除